



INVITATION

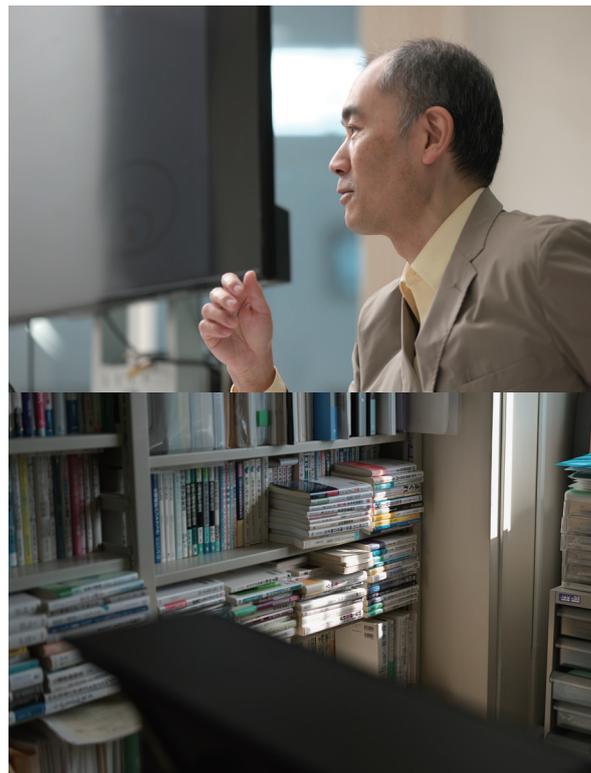
文京学院大学
人間学部心理学科

文京学院大学ふじみ野キャンパス。ここは人間学部、保健医療技術学部、大学院がある。東武東上線ふじみ野駅からスクールバスで10分ほどの場所に建つ、ゆったりとした明るいキャンパスだ

嘘の真実を探る

学科長 教授 村井潤一郎さん

「実は、こういう取材は極力受けないようにしています」と村井さん。理由は、発言の一部を切り取られて本来の意図と異なる伝えられ方をされたり、間違っただけの内容が伝わってしまったりするのが嫌だから。伝える側として肝に銘じておきたい



人は1日1回以上嘘をついている

あなたはこれまでの人生で嘘をついたことがありますか。そう聞かれて「いいえ」と答える人は、まずいないだろう。では、日常生活の中で人はどれくらい嘘をついているものなのか。ある調査研究では、平均すると「1日に1〜2回」という結果が示されている。多いと感じるだろうか、少ないと感じるだろうか。

この興味深い結果を報告したのが、今回お訪ねした文京学院大学人間学部心理学科学科長・教授 村井潤一郎さん。「嘘」を研究テーマとする心理学者だ。「18〜25歳の大学生や大学院生、男女12名ずつに参加してもらい、嘘についての記録をとってもらいました」。

調査では日記法という手法を用いたため、記録用紙を便宜上「嘘日記」と呼んでいる。嘘日記には毎日の生活の中であった社会的相互作用(10分以上続く、2人かそれ以上での相互的なやりとり)の内容と、その中で自分が嘘をついたとき、嘘をつかれたと感じたときの内容、そう感じた理由などを記録する。これを1週間にわたって続けてもらった。

その結果、男性は社会的相互作用が1日平均4.15回、そのうち嘘をついたのは1.57回で、相互作用2.7回につき1回嘘をついていた。女性は社会的相互作用が1日平均6.54回、うち嘘をついたのは1.96回で、相互作用3.13回につき1回嘘をついていた。おしなべて言うと、挨拶よりも長く続くやりとりが1日のうちに何度かあり、おおむねその3回に1回の割合で人は何かしらの嘘をついているということになる。



ふじみ野キャンパスの正面玄関を入るとまず、3階まで吹き抜けのアトリウムが現れる。イベント会場などにも利用されている広々とした空間だ。人間学部はコミュニケーション社会学科、児童発達学科、人間福祉学科、心理学科の4学科で構成され、人間理解を深めるための総合的な学びの場を提供している

私はそんなに嘘をついていないと思うかもしれない。ただ、この場合の嘘とは明らかに相手を騙そうとすることだけでなく、質問の答えをはぐらかす、気の進まない誘いを有事があると断るなどにも含む。本当は具合が悪いときに「大丈夫」とにっこりして見せるのも嘘と言えば嘘で、そうしたことも含めれば、人はけっこう嘘をついているものなのかもしれない。

「同じ手法を用いたアメリカでの先行研究では、大学生の男性は1日平均で1.84回、女性は2.04回の嘘をついていたと報告されています。私の研究とあまり差はありません。嘘をどれだけつくかは、その国や地域の文化的背景、生活環境などによっても異なると思いますが、少なくともこの研究結果からは、日米で顕著な差はなかったと言えます」と村井さんは話す。「1日1嘘以上」が私たちの嘘の実態であるようだ。

嘘の中身は幅広い

それだけ嘘をついている一方で、「嘘は悪いこと」と教えられて私たちは育つ。そもそも嘘とは何なのだろうか。

「心理学の辞典的に言えば、嘘とは『意図的にだます陳述』を指し、単なる不正確な陳述とは異なります。道を聞かれて正しいと思う道を教えたところ、実はその道は間違っていたというケースは嘘とは言わないわけです。『虚偽』も嘘とほぼ同義ですね。近い言葉に『欺瞞(ぎまん)』がありますが、嘘は主に言語的なものを指すのに対して、欺瞞は生物の擬態のように相手をあざむくことや、言葉ではなく態度ではぐらかすといった非言語的なものも含まれます。ただ、研究者のあいだでも嘘と欺瞞の区別は厳密ではありません。ここでは、虚偽性と意図性を含む言葉や態度、行動などをおしなべて『嘘』と呼んで構わないでしょう」。

村井さんの研究テーマは「欺瞞的コミュニケーション」、相手の誤解を誘うことや、真実を話しつつも肝心な部分を隠蔽して偽ることなど、狭義の嘘と欺瞞との中間的な概念

を指す。「例えば、契約書の隅に小さく書いてある条項とかは、わざと気づかれないように書いてだますつもりじゃないのかとモヤモヤしますよね。ドラッグストアで『ポイント3倍』と張り紙があるから『今日は3倍だ!』と嬉しくなってお店に入ってよく見ると『毎週火曜日ポイント3倍』で、火曜日じゃなくても張り紙が掲示してある。明らかな嘘ではないけれど、お客をだまそうとしています。そう考えると結構広い概念なのですが、その広さが重要なのだと思っています」。

明らかな虚言から、ミスリードに近い表現、そして非言語で相手をあざむくことまで、嘘の世界にはスペクトルがあり、その一部分が欺瞞的コミュニケーションである。人間のコミュニケーションでは、場面、各人が置かれた立場、心理、文化的背景などのさまざまな条件が絡み合っただけで嘘がつかれ、だまし、だまされる。その複雑さと広がりには、人間の心の複雑性が投影されているのかもしれない。

「嘘は見破れる」は嘘

「嘘に限ったことではありませんが、心に関わる現象の中でも嘘というものは、とりわけ心と深く結びついた現象に思えます。それだけに生々しくもあるし、心理学研究では扱いが難しい面もあります」と村井さんは話す。そのような嘘を研究対象としたのはなぜか訊ねてみると、「なんとなく、です」という答えが返ってきた。「ただ、『なんとなく』ってけっこう重い言葉で、その人のリアルが表れます。何かしら引っかかりを感じるということは、心のどこかで気になっているということ。だから心理学者が選ぶ研究テーマって、その人自身の『らしさ』の表れだと思うと、ときに研究結果以上に面白かったりすることもあるでしょう」。

なんとなく、おもしろそうだ、と嘘を研究テーマに選択したのが大学院の修士1年のとき。いざ研究を始めてみると、いかにも関心の高そうなテーマでありながら国際的に見ても嘘について研究する心理学者はそれほど多くなく、意外だったと話す。「嘘を見破る方法のような応用的研究

「文京学院大学の特色は、総合大学としては規模が大きくないこともあって教員が学生を手厚くフォローしていて、アットホームな雰囲気が漂っていることでしょうか。学生も気立てのいい人が多い印象です」と、村井さん

記事はWebでも
閲覧できます。

<http://www.labscope.net>



Lab SCOPE WEB



は注目されがちですが、嘘そのものを心理学的に追求しようとする人はあまりいないのかもしれない。

たしかにインターネットで検索すると嘘を見破る方法が列挙され、視線、汗、声のトーンなど、嘘をついているときのサインがこと細かに解説されている。では、実際に嘘を見破ることは可能なのか。嘘の専門家である村井さんは「困難なタスクですね」と言い切る。先述した「嘘日記」による調査でも、1日に嘘をついた回数が男性1.57回、女性は1.96回だったのに対し、嘘をつかれたと思った回数は、男女ともに0.36回だった。嘘をついたのは1日に1〜2回であるのに対し、嘘をつかれたと感じるのは3日に1回程度。人はそれだけ多くの嘘に気づいていないということになる。

「2006年にアメリカの研究者たちが、嘘に関する研究論文206編についてメタ分析をした結果、嘘発見の正答率は50%を少し超えるぐらいでした。あてずっぽうより若干いい程度ですね。また、人は嘘をつくときに目を逸らすなどよく言われますが、嘘をついたときの視線の変化について調べた複数の論文を比較してみても、結果はまちまちで、それは視線以外も同様です。『嘘は見破れるというのは嘘』だと思ったほうがいいでしょう」。

私たちが嘘を見破れない理由として、村井さんはまず「心の複雑性」を挙げる。話し手と聞き手、それぞれの心は刻々と変化するため、同じことを話しても真実に思えたり嘘に思えたり、一様ではない。また、日常生活における嘘と真実の割合も関係していると推察する。「普通に生きていれば真実のほうが多いわけですから、まずは人を信じるのが圧倒的に効率的であり、適応的ですよ。だからTruth-Default——まずは信用することからコミュニケーションが始まるというのがわれわれ人間の真実なのです」。

すべてを疑ってかかっていたら社会はギスギスしてしまふ。「ある程度、嘘に鈍感なおかげで社会生活が円滑に営まれているのだと思います」。

「嘘はダメ」は思考停止

このTruth-Defaultを逆手にとってるのが、特殊詐欺をはじめとする詐欺犯罪だ。「信じようとする心を悪用す

るのは許されません」と言う村井さんだが、だまされる心理も理解できると話す。自身も、嘘の研究を始めたばかりの大学院生のとき、旅行先のスペインでニセ警官に数万円をだまし取られるという経験をしている。「だます側は巧妙にシナリオをつくってきます。そこにのせられてしまったらもう冷静な判断が難しくなることがよくわかりました」。自分はだまされないという過信は禁物だ。特殊詐欺を防ぐには、シナリオの外にいる周囲の人々が気づいてあげることが肝要だろう。

「詐欺のように、人の心理につけ込む嫌な犯罪はなくなってほしいですよ。それに貢献できるかどうかはわかりませんが、嘘と真実を判断するメカニズムを明らかにしていくことや、国内の嘘研究を盛り上げていくことが私のこれからの目標の一つです。そのために科学研究費を活用して、広く研究者の皆さんに使っていただくための『真偽刺激データベース』の構築も進めています」。このデータベースは、嘘をついている動画と、本当のことを話している動画を制作して蓄積し、心理学研究に役立ててもらおうというもの。コロナ禍でデータベースを構築するペースは落ちたが、今後さらに動画の数を増やしていく計画だ。

悪意をもって人をだますのは許せないが、人間関係の潤滑油の役割も果たしている嘘。私たちは、嘘をどんなふうに捉えるべきなのか。

「単純に嘘はダメ、と切り捨ててしまうのはよくない。思考停止ですよ。なぜその嘘がつかれたのか、背景を考えることに意味があり、その先の発展があるはず。また、最近は生成AIの嘘や間違いも問題になっていますが、それに気づくためには正しい知識を獲得する努力を日々続けることも必要でしょう」と村井さんは語る。そしてこんなふうに締めくくった。

「ある心理学の論文に、次のようなユダヤの古い諺が書かれていました。An insincere peace is better than a sincere war. ——不誠実な平和は誠実な戦争よりよい。本当のことを言って修復不可能な関係になるよりは、嘘を潤滑油としながら、たとえ表面的であっても仲良くしたほうがましという状況はわりと多いのではないのでしょうか。国際関係でも普段の人間関係でも、このように嘘を捉えるのがよいのではと思います」。(取材・文 関 亜希子)